

先輩に続け

ポジティブ思考

徳島県警察本部刑事科学捜査研究所 所長補佐
寒川 克也 (かみがわかつや)

はじめに

平成5年度、薬学研究科を修了し、科学捜査研究所(通称「科捜研」)に奉職してから22年目を迎えました。学生当時には、京都で多発する殺人事件を解決していく「科捜研の女」の活躍などがなかったため、科捜研の存在や役割を全く知りませんでした。最近では、国内外のドラマや映画に科捜研が登場し、知名度も上がり、採用試験では数多くの受験者が殺到する程になりました。

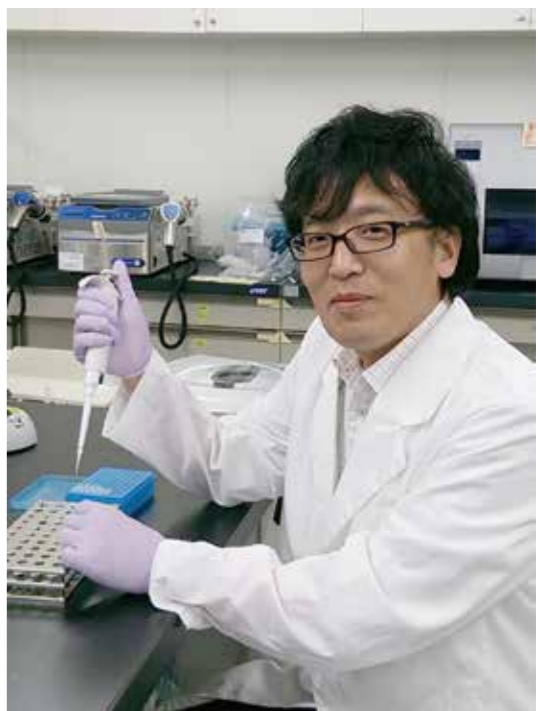
科捜研の紹介

科捜研は、法医・化学・工学・人文科に分かれており、地方公務員の研究職として採用されます。

それから科学警察研究所(国の機関)で所要の研修を受け、専門的な知識や技術を修得し、鑑定ができるようになります。事件や事故が発生すれば、事件の解明、犯人の検挙、犯行の裏付け等を目的とし、客観証拠を得るため、昼夜を問わず鑑定することになります。

法医科の任務

大学時代、動物を扱う実験が苦手な私は、将来は化学系に就職したいと考え、有機合成を3年間専攻していました。ところが、担当業務は、生体資料を扱う生物系の法医科です。当然、死体や白骨を扱う鑑定もあり、当時の将来像とは、全く異なる方向になりました。法医鑑定とは、犯罪現場に遺留さ



筆者(鑑定時はマスク等を着用)

れた凶器に付着した血液や皮膚片、被害者に付着した体液等を証明し、その血液型やDNA型を検査します。最近では、DNA型鑑定が主流となり、犯罪捜査には欠かせないものとなっています。自分の鑑定結果が、犯人検挙の決め手になることも、裁判で揺るぎない証拠になることもあります。まさに、ドラマが現実化した世界を実感できる瞬間があります。ただ、いつも効果的な結果が得られるものではなく、悔しい思いをすることも

力や説明力も必要になると考えられます。

おわりに

大学時代の知識や技術を生かせる職に就きたいと考える学生は多いと思います。理系である私の場合、希望と違った分野で、司法関係に携り、文系的な知識も必要な職に就きました。それでも、知らない分野の勉強ができて面白いとポジティブに考え、何事にも積極的に取り組んできました。今では、犯罪現場から公判までのあらゆる場面で助言を求められる鑑定官、「科捜研の男」として日々、悪と戦っています。未来では、現在の何が役に立つのか全く読めません。とりあえず、前向きに考え、どん



鑑定装置



クリーンルーム内の風景



私は、2014年9月から

2015年の3月まで、日亜化学工業教育研究助成基金「若手教員海外派遣支援事業」の支援により、アメリカ合衆国ニューヨーク市のロックフェラー大学での研究留学の機会を頂きました。ロックフェラー大学は1901年に設立されたロックフェラー医学研究所を前身とし、生物医学分野の卓越した研究を行っています。私がお世話になったのは、連鎖球菌などの細菌が作る溶菌酵素の基礎的・応用的研究において世界的に著名なVincent A. Fischetti教授の研究室です。Fischetti教授の研究室は国際色が豊かで、ヨーロッパやアジア出身の多くの研究者が在籍しています。研究室の雰囲気は自由で友好的であり、研究室メンバーが効果的に連携しながら研究を進めています。また、研究活動のみならず、様々なイベントも計画して研究室で過ごす時間をメンバー同士で楽しく共有していることが印象的でした。年末のクリスマスが近づくと、Fischetti教授の研究室では「エッグノック」という飲



Fischetti教授と一緒にエッグノック作り

ロックフェラー大学への研究留学の機会を得て

徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部ライフシステム部門 助教

田端 厚之 (たばたあつし)

み物を作るという恒例行事があり、今回私もその作業のお手伝いをさせて頂きました。このような研究室の雰囲気の中で温かいメンバーに囲まれ、短い期間ながらも充実した研究留学生活を送ることがで

きました。

研究以外にも、今回の留学では多くの経験を得ることができました。秋の爽やかな気候の中で始まった留学生活ですが、青森とほぼ同じ緯度のニューヨークの冬は、街の華やかな雰囲気からは想像できないような厳しい寒さに見舞われます。今回も年明けに本格的な寒さに見舞われ、2月は記録的な冷え込みになりました。私はこれまで雪を経験することがほとんど無い地域で生活してきましたので、雪化粧のニューヨークに最初は年甲斐も無くはしゃぎ気味でしたが、さすがに本格的なニューヨークの厳しい冬を経験すると、最後は閉口気味でした。ロックフェラー大学のすぐ横を流れるイーストリバーでは、間近で人生初となる流水を見ることができたことが今も印象深く残っています。今回の研究留学では、普段、徳島大学で研究している中ではできない数多くの貴重な経験を頂きました。実際に海外の研究室の一員として研究活動を行うことによって、その分野の研究の最先端のトレンドを再認識できるだけでなく、新たな視点から自らの研究を振り返ることができ、自身の研究に関する視野が大きく広がりました。また、海外の研究グループとの新



イーストリバーの流水



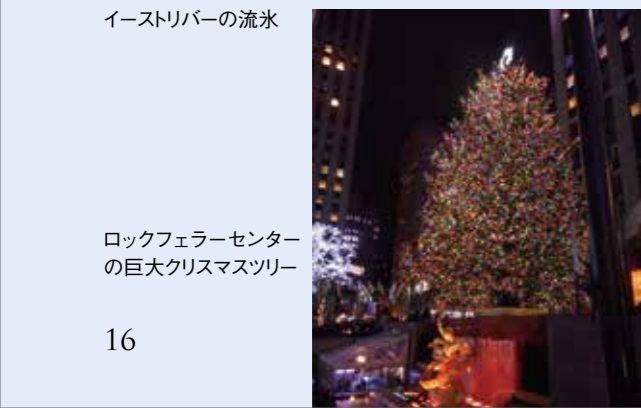
ロックフェラー大学の雪景色



マンハッタン島対岸のルーズベルト島より、ロックフェラー大学を望む

たな繋がりが構築できたということも、私にとって大きな財産です。現在、徳島大学では教育および研究活動の国際化を目指して様々な取り組みが展開されていますが、今回の研究留学で得た経験を生かし、微力ながら徳島大学における教育研究の国際化のお役に立てればと思います。

最後になりましたが、今回の研究留学による不在期間中にいろいろとご対応頂きました長宗秀明教授をはじめとする工学部生物工学科の先生方やスタッフの皆様、生物工学科A4講座の研究室メンバー、そして私を温かく受け入れてくださいましたFischetti教授とその研究室メンバーの皆様、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。



ロックフェラーセンターの巨大クリスマスツリー